

〈原著論文〉

困難への挑戦心を支える認知的基盤： 領域自尊心に着目して

竹橋 洋毅*, 島井 哲志**

Cognitive background of challenging to setback :
focusing on domain specific self-esteem

Hiroki Takehashi and Satoshi Shimai

要旨：本研究では、非認知的スキルや領域自尊心に関する知見に基づき、困難への挑戦心を支える認知的基盤について探索した。本研究では、内閣府により実施され、1,175人の若者（13歳から29歳）が自己意識について回答したインターネット調査のデータを分析した。自己認知の項目についての因子分析の結果、困難への挑戦心は自己肯定感とは異なる因子として抽出された。また、困難への挑戦心は「忍耐力・努力家であること」、「体力・運動能力」などの領域自尊心と関連していた。この関係は、自己肯定感などの他の自己認知について分析した場合にはみられなかった。これらの結果は、困難への挑戦心を育成する教育方法が自己肯定感を高める活動とは質的に異なる可能性を示唆している。

Abstract： Based on knowledge relating to non-cognitive skills and specific areas of self-esteem, this study explored the foundation of cognitive qualities that supports the determination to overcome setbacks. In order to do so, this study analyzed the data from an internet survey conducted by the Japanese Cabinet Office on 1,175 young Japanese between the ages of 13 and 29 concerning self-consciousness. An analysis of responses relating to self-perception showed that the factors relating to said determination differed from factors relating to self-affirmation. Moreover, the analysis also confirmed that specific areas of self-esteem — such as being patient and hardworking, or physically strong and skilled at sports — were related to the determination to overcome setbacks. These relationships were not found when analyzing self-perceptions such as self-affirmation. These results indicate that the educational methods in place to nurture the determination to overcome setbacks are qualitatively different to those activities aimed at heightening self-affirmation.

Key words： 困難への挑戦心 challenging to setback 動機づけ motivation 自尊心 self-esteem 原因帰属 causal attribution

I. 問題

現代社会では、科学技術の進展やそれに伴う社会のありようの変化が著しいだけでなく、グローバルゼーションやインターネットの普及によって世界レベルでの経済や社会の相互依存性がますます高まりつつある。これらの理由から、遠い他国の出来事が自分の生活に大きな影響を及ぼす可能性が増加している。このように変化が大

きく不確実な現代では、個人にせよ組織にせよ、過去にうまくいっていた慣習に従っているだけでは持続的な発展が困難であるといえる。それでは、現代社会が個人に求める資質や能力とは何であろうか。よく指摘されるのは、未来を予見する力である。しかしながら、将来重要になるだろう事柄を予測できるかということと、そのために意欲的に取り組めるかということは、異なる問題である。社会の変化に適応する上では、自分にとって難

受付日 2017. 5. 26 / 掲載決定日 2017. 12. 5

*関西福祉科学大学 心理科学部 講師

**関西福祉科学大学 心理科学部 教授

しように思えることでも意欲高く取り組むという困難への挑戦心が鍵となる。また、実際に人の能力を伸ばす上でも困難への挑戦心が極めて効果的に働いていることがエキスパート²⁾や学習方略³⁾の研究により明らかにされている。以上を踏まえると、困難への挑戦心は、現代社会における最も重要な資質の一つであり、その育成は重要な教育課題として位置づけることができる。そこで、本研究では困難への挑戦心に関する知見について俯瞰した上で、その効果的な育成方法について示唆を得ることを目的とする。

成功を予測する資質とは何かという問いは、James⁴⁾以来、心理学では 100 年以上にわたり検討が重ねられ、数多くの知見が蓄積されている。古典的には知能への関心が寄せられてきたが、大きな成功を達成した者とそうでない者では知能指数に顕著な違いはないという知見^{5,6)}が示され、より予測力の高い資質が探索されるようになった。近年、このような流れの中で注目されるようになったのが困難への挑戦心や自己統制などの非認知的スキルとよばれる資質である。非認知的スキルとは、知能などの認知的スキルではなく、目標や意欲、興味・関心をもち粘り強く取り組む力や姿勢のことをさす。長期的な成果を予測する上で、非認知的スキルの有効性を示す知見がいくつも提出されている。例えば、4 歳児の時点で長期的な利益（例：15 分後のマシュマロ 2 つ）のために短期的な誘惑（例：いますぐのマシュマロ 1 つ）を退けるという自己統制能力が 10 歳代の学力や社会適応を予測できるだけでなく、約 40 年後の年収や社会的成功、健康状態を予測できることが明らかにされている⁶⁾。本研究の関心である困難への挑戦心に注目すると、困難への挑戦心は学力の伸び⁷⁾、スペリング・コンテストでの順位や士官学校からの中退⁸⁾などの長期的な目標の成否に影響を及ぼす可能性が示唆されている。

困難への挑戦心が長期的な成果を引き寄せる理由としては、以下の 2 つを指摘することができる。一つは労力の投入量の違いが挙げられる。困難への挑戦心が高い人ほど高い成果を得ていた原因としては、努力量の多さが潜在していることが示唆されている^{2,8)}。また、困難への挑戦心が高い人は失敗時に無力感を体験しにくいことも示唆されており⁷⁾、進捗が見られないネガティブな状況下でも努力を重ねやすいと考えられる。このように、困難への挑戦心が高い人はそうでない人よりも努力を多く重ねるので、高い成果を得やすいといえる。困難への挑戦心が成果を引き寄せるもう一つの理由としては、学習方略としての有効性を指摘できる。学習方略を専門とする心理学者への調査によれば、能力を伸ばす上では簡単にできる課題に取り組むよりも、難しかったり間違え

たりした問題に粘り強く挑戦し続けることが有効であるとされている³⁾。この視点は教育心理学において望ましい困難さ（desirable difficulty）と呼ばれており⁹⁾、この視点について生徒に伝達することで学力向上を目指す教育的介入¹⁰⁾も登場している。

それでは、困難への挑戦心を高めるにはどうしたらよいのであろうか。この問題について扱う研究の多くが共通して指摘するのは、「自分が努力すれば、その問題を解決することができる」というコントロールに関する信念である。Bandura は、困難への挑戦心を支える心的要因として自己効力感を挙げている¹¹⁾。また、Dweck は困難に直面した際、「能力は生まれつきのものだ」とする固定的知能観をもつ人では意欲が低下するのに対し、「能力は自分が努力すれば向上できる」とする増大的知能観をもつ人では意欲が高いことを示唆している¹²⁾。このようなコントロールに関する信念は、あくまでも自己認知であるため、周りからの働きかけによって変えることができる。例えば、「能力は努力により高めることができる」という脳科学の知見を伝えることで、コントロールに関する信念を変化させて、困難への挑戦心を高めることができ、長期的には学力を伸ばすことができることが示唆されている⁷⁾。いまは困難に思えても努力すれば解決できるという将来への肯定的な見通しが挑戦への扉を開くといえる。

このようなコントロール感の源泉としては、個人の成功体験の重要性が指摘されている。例えば、Bandura は自己効力感の源泉としてコントロール体験、代理経験、社会的説得、生理的覚醒の 4 つを挙げているが、最も影響力が強いものとしてコントロール体験を位置づけている¹¹⁾。Bandura は、強い効力感を形成する上ではたやすい成功経験だけでは不十分であり、忍耐強い努力によって障害に打ち勝つ体験が求められるとしている。また、増大的知能観を育成する教育的介入においても、能力の成長可能性を伝達するだけではなく、参加者自身の成長体験を想起させ、ワークシートにより言語化させることに多くの時間を割り当てている¹³⁾。困難のなかで成しとげた経験は、成しとげた目標に関連する領域でのコントロール感を増大させる。例えば、勉強での成功体験は勉強領域への自己効力感を高めるかもしれないが、運動などの他の領域への自己効力感を高めるわけではない。自己効力感には領域固有性という観点が含まれているといえる。

この領域固有性の観点は、困難への挑戦心について考える上で極めて重要である。Mueller & Dweck は、努力して成しとげたことをほめた場合には困難への挑戦心が高まるのに対し、もともとの頭の良さをほめた場合には

困難への挑戦心が何もほめなかった統制条件よりも低下することを報告している¹⁴⁾。また、自己への全体的評価である自尊心は、素朴には様々な肯定的な影響力をもつ心的要因であるとみなされることが多いが、交絡変数の影響をコントロールした実証研究においては学力を向上させるなどのポジティブな影響力が見られないことも報告されている¹⁵⁾。これらの知見を踏まえると、困難への挑戦心はコントロールに関連した領域での成否により影響されるのに対し、自己に対する全体的評価は「自己全体」への評価であるがゆえに、コントロールの成否だけでなく、もともと備えている資質や容姿の良さなどの様々な要因により影響されるという点で、質的に異なっていると考えられる。この議論と軌を一にして、近年では自尊心とその源泉となる領域を分けて測定し、両者の関係性について検討する研究が報告され始めている¹⁶⁾。この領域的な自尊心と困難への挑戦心の間にどのような関係性があるかについては直接的な検討がなされてきていないが、効果的な教育方法について考える上では重要であろう。例えば、困難への挑戦心を育成するために、教育者が子どもに対してどのような意味での自負をもたせるように働きかけをするべきかについて考える上では、領域自尊心と困難への挑戦心の関係性についての知見が示唆に富むと考えられる。

以上の議論を踏まえて、本研究では困難への挑戦心を支える心的要因として領域自尊心に焦点をあて、どのような自尊心の領域が困難への挑戦心と強く関連するかについて探索することを主たる目的とする。強い自己効力感が忍耐強いコントロール体験により育まれるとする Bandura の主張¹¹⁾を踏まえると、忍耐強さなどの自己統制にかかわる領域での自尊心は困難への挑戦心と関連すると予測される。一方で、容姿などの自己統制とは関連しない、もともとの資質にかかわる領域での自尊心は困難への挑戦心と関連しないと予測される。この仮説について検討するため、本研究では内閣府により実施された「平成 25 年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」¹⁷⁾のデータを二次分析することとした。本調査では困難への挑戦心や自己肯定感などの自己認知だけでなく領域的な自尊心などについても測定されており、本研究の仮説について検討するのに適していると判断された。

本研究では、補足的な興味として、次の 2 点についても検討する。まず、困難への挑戦心の性質についての理解を深めるため、自己に対する全体的評価の 1 つである自己肯定感などの他の自己認知についても分析に含め、自己認知間の関係性について探索することとした。また、知能観に関する研究¹²⁾では、成功や失敗に対する原因帰属のスタイルが困難への挑戦心に影響を及ぼすこと

が示されている。すなわち、成功や失敗の原因が努力にあると考える人は能力や外的要因にあると考える人よりも困難への挑戦心が高いとされる。本研究で扱う調査には原因帰属に関する質問項目も含まれており、この先行研究の知見について再現性を検討するために、原因帰属のスタイルと困難への挑戦心の関係についても分析することとした。

II. 方法

1. 調査概要と分析対象

本研究では、内閣府によって実施された「平成 25 年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」の回答データを利用した。この調査は、日本を含む 7 カ国に居住する 13 歳から 29 歳までの男女を対象とするもので、平成 25 年 11 月から 12 月までの間にインターネット調査形式で実施された。本研究では、本邦における困難への挑戦心の育成に関心があったため、日本人のデータ ($N=1,175$) のみを分析対象とした。表 1 に、調査対象者の構成比を示す。

2. 分析項目

本研究では以下の項目について分析対象とした。

自己認知：「平成 25 年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」には、自分認知についての 10 項目が含まれていた。本研究では「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」という項目を困難への挑戦心の指標として用いた。また、「私は自分自身に満足している」を自己満足感、「自分には長所があると感じている」を自己肯定感、「自分の親から愛されている（大切にされている）と思う」を愛着知覚、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」を自己主張、「今が楽しければよいと思う」を快樂主義、「自分は役に立たないと強く感じる」を自己否定感、「人は信用できないと思う」を他者不信、「よくうそをつく」を虚偽、「早く結婚して自分の家族を持ちたい」を早婚願望の指標とした。これらの評定は、4 件法であった（1. そう思うー 4. そう思わない）。なお、愛着知覚は父親または母親が健在の人のみを対象、早婚願望は未婚の人のみを対象とした項目であった。

領域自尊心：自分について、どのような側面に対して誇りを持っているかを回答するように求めた。評価を求

表 1 調査対象者の構成比 (%)

	13-15 歳	16-19 歳	20-24 歳	25-29 歳
男性	9.9	13.4	13.4	15.6
女性	7.8	12.1	13.3	14.6

めた側面は、「明るさ」、「やさしさ」、「忍耐力・努力家」、「慎しみ深い」、「賢さ・頭の良さ」、「まじめ」、「正義感」、「決断力・意志力」、「体力・運動能力」、「容姿」であった。評定は、4 件法で行われた (1. 誇りを持っている - 4. 誇りを持っていない)。

帰属スタイル：「あなたは社会に出て成功するのに最も重要なものは何だと思いますか。この中から、1 つ選んでください」という教示文に続き、選択肢として「身分・家柄・親の地位」、「個人の才能」、「個人の努力」、「学歴」、「運やチャンス」、「その他・わからない」の 6 つが提示された。なお、これらのなかで、内的かつ統制可能な要因への帰属として明確に分類できるのは「個人の努力」のみであり、「身分・家柄・親の地位」と「運やチャンス」は外的かつ統制不可能な要因への帰属、「学歴」と「その他・わからない」は統制の位置や統制可能性があいまいな要因への帰属として位置づけること

ができる。

Ⅲ. 結果

1. 記述統計量

自己認知の項目についての度数分布を表 2、領域自尊心の項目についての度数分布を表 3、帰属スタイルの項目についての度数分布を表 4 に示す。ここでは、本研究の主たる関心である困難への挑戦心と、わが国の教育において困難への挑戦心を育む上で役立つと論じられる¹⁸⁾ 自己肯定感に焦点を当てる。困難への挑戦心の項目では、肯定的な回答が 52.2%、否定的な回答が 47.8% であり、ほぼ半々であった (歪度は 0.05)。自己肯定感では肯定的回答が 68.9% と分布が左右対称でなく (歪度は 0.53)、困難への挑戦心と自己肯定感は異なる分布の特徴を示した。

表 2 自己認知の項目についての度数分布 (人) と比率 (%)

	そう思う		どちらかといえば そう思う		どちらかといえば そう思わない		そう思わない		欠損値	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
困難への挑戦心	104	8.9	509	43.3	468	39.8	94	8.0	0	0.0
自己満足感	88	7.5	450	38.3	375	31.9	262	22.3	0	0.0
自己肯定感	179	15.2	631	53.7	240	20.4	125	10.6	0	0.0
愛着知覚	403	34.3	556	47.3	136	11.6	50	4.3	30	2.6
自己主張	109	9.3	455	38.7	449	38.2	162	13.8	0	0.0
快樂主義	180	15.3	512	43.6	376	32.0	107	9.1	0	0.0
自己否定感	165	14.0	389	33.1	463	39.4	158	13.4	0	0.0
他者不信	146	12.4	429	36.5	489	41.6	111	9.4	0	0.0
虚偽	70	6.0	269	22.9	578	49.2	258	22.0	0	0.0
早婚願望	145	12.3	336	28.6	368	31.3	202	17.2	124	10.6

表 3 領域自尊心の項目についての度数分布 (人)

	誇りを 持っている		どちらかといえば 誇りを持っている		どちらかといえば 誇りを持っていない		誇りを 持っていない		欠損値	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
明るさ	187	15.9	464	39.5	347	29.5	177	15.1	0	0.0
やさしさ	248	21.1	592	50.4	244	20.8	91	7.7	0	0.0
忍耐力・努力家	198	16.9	520	44.3	309	26.3	148	12.6	0	0.0
慎しみ深い	99	8.4	510	43.4	438	37.3	128	10.9	0	0.0
賢さ・頭の良さ	110	9.4	430	36.6	442	37.6	193	16.4	0	0.0
まじめ	224	19.1	589	50.1	267	22.7	95	8.1	0	0.0
正義感	156	13.3	520	44.3	378	32.2	121	10.3	0	0.0
決断力・意志力	100	8.5	409	34.8	479	40.8	187	15.9	0	0.0
体力・運動能力	92	7.8	335	28.5	428	36.4	320	27.2	0	0.0
容姿	49	4.2	343	29.2	494	42.0	289	24.6	0	0.0

表 4 帰属スタイル (社会的成功の最重要因) の度数分布 (人) と比率 (%)

	個人の努力		個人の才能		運やチャンス		その他・ わからない		身分・家柄・ 親の地位		学歴	
	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率	度数	比率
回答	399	34.0	297	25.3	202	17.2	113	9.6	87	7.4	77	6.6

表5 困難への挑戦心と他の自己認知の間の相関係数

	自己満足感	自己肯定感	愛着知覚	自己主張	快楽主義	自己否定	他者不信	虚偽	早婚願望
困難への挑戦心	.33	.43	.28	.51	.08	-.23	-.11	-.10	.19

$p < .01$

2. 困難への挑戦心と他の自己認知の関連

困難への挑戦心の性質について探索するため、まずスピアマン順位相関検定を行った。困難への挑戦心と他の自己認知の間の相関係数を表5に示す。困難への挑戦心は自己満足感や自己肯定感、自己主張と正の相関を示したが、その強さは中程度であった。

次に、自己認知の項目群について、最尤法プロマックス回転の探索的因子分析を行った。固有値1以上の基準で因子数を決定した結果、3因子解が抽出され、適合度は良好であった ($\chi^2(18) = 55.12$, $p < .01$, CFI = .98, RMSEA = .05)。なお、共通性が低い項目が見られたが、本研究では困難への挑戦心の性質を探ることに関心があり、心理尺度を構成することを目的としていないため、共通性の低い項目を除外して再分析を行わないこととした。この分析の因子負荷量についての結果を表6に示す。なお、因子間相関は、因子1と2では.67、因子1と3では-.51、因子2と3では-.61であった。

各因子に含まれる項目から、因子1は「自己の積極性」、因子2は「現状の受容や肯定」、因子3は「人への信頼感」に関連した因子であると解釈できる。困難への挑戦心は自己主張とともに因子1に属す一方、自己満足感、自己肯定感、快楽主義は因子2に属しており、別々の因子として抽出された。困難への挑戦心は自己肯定感などの現状の肯定や受容とは異なる性質を有すると考えられる。

3. 困難への挑戦心と領域自尊心の関係

本研究では困難への挑戦心と領域自尊心の関係について分析することが主目的であるが、困難への挑戦心の性質を明らかにする上で有用であると思われる自己認知の変数についても同様の分析を行った。即ち、困難への挑戦心と同一因子への因子負荷量が高い自己主張、困難への挑戦心との関連が想定されている自己肯定感、自己肯定感と同一因子への負荷量が高い自己満足感を取り上げることとした。各自己認知（困難への挑戦心、自己主張、自己満足感、自己肯定感）の得点を従属変数、10の領域自尊心の得点、性別（男性=0, 女性=1）、年代を独立変数とするステップワイズ法による順序回帰分析を行った。近似標準化係数についての結果を表7に示す。どの自己認知においても、「明るさ」および「決断力・意志力」との正の関連が見られた。困難への挑戦心

表6 自己認知項目についての因子分析

	因子1	因子2	因子3	共通性
困難への挑戦心	.88	-.14	.04	.61
自己主張	.61	.08	.00	.44
愛着知覚	.33	.11	-.03	.18
早婚願望	.28	-.03	.03	.06
自己満足感	.00	.73	-.07	.60
快楽主義	-.05	.52	.32	.15
自己肯定感	.29	.45	-.11	.56
他者不信	.08	.13	.77	.44
自己否定	.02	-.16	.65	.55
虚偽	-.07	.32	.59	.24

表7 自己認知を従属変数とする順序回帰分析の結果（近似標準化係数）

	自己認知			
	困難への挑戦心	自己主張	自己満足感	自己肯定感
自尊心の領域				
明るさ	.24**	.30**	.25**	.22**
やさしさ				.08*
忍耐力・努力家	.24**		.09**	
慎み深い				
賢さ・頭の良さ		.07*	.12**	.14**
まじめ				.13**
正義感				
決断力・意志力	.19**	.38**	.13**	.17**
体力・運動能力	.08*			
容姿			.18**	.20**
性別		.05*		
年代	-.05*		.05*	
調整済み R^2	.33**	.38**	.33**	.45**

* $p < .05$, ** $p < .01$

に特徴的な点としては「忍耐力・努力家」や「体力・運動能力」との正の相関、年代との負の相関（この相関は年代が高くなるほど、困難への挑戦心が高くなることを意味している）が見られた。一方、自己満足感や自己肯定感では「賢さ・頭の良さ」や「容姿」との正の相関が見られた。また、関連が見られた自尊心の領域の数に焦点を当てると、困難への挑戦心では4つ、自己主張では3つ、自己満足感では5つ、自己肯定感では6つであり、「現状の肯定や受容」の因子に関する項目のほうが「自己の積極性」の因子に関する項目よりも幅広い領域の自尊心が関わっている可能性が示唆された。

4. 困難への挑戦心と帰属スタイルの関連

帰属スタイルと自己認知の関連について探索するため

に、まず、困難への挑戦心の得点を従属変数、帰属スタイルを独立変数とする一要因の分散分析を行った。その結果、帰属スタイルの主効果が有意となった ($F(5, 1169) = 5.25, p < .01, \eta^2 = .02$)。多重比較の結果、最も重要な成功因として「個人の努力」を選択した人は、「身分・家柄・親の地位」、「個人の才能」、「その他」を選択した人よりも、困難への挑戦心が強かった ($ps < .05$)。

他の自己認知項目についても、同様の分析を行った。自己満足感では、帰属スタイルの主効果が見られたが ($F(5, 1169) = 2.97, p < .05, \eta^2 = .01$)、多重比較ではいずれの群間にも有意差は検出できなかった。自己肯定感では、帰属スタイルの主効果が有意で ($F(5, 1169) = 6.31, p < .01, \eta^2 = .03$)、多重比較の結果、「個人の努力」を選択した人は「身分・家柄・親の地位」、「学歴」、「その他」を選択した人よりも自己肯定感が強かった ($ps < .05$)。また、「個人の才能」や「運やチャンス」を選択した人は「その他」を選択した人よりも自己肯定感が強かった ($ps < .05$)。自己主張では、帰属スタイルの主効果が有意で ($F(5, 1169) = 5.25, p < .01, \eta^2 = .01$)、「個人の努力」を選択した人は「その他」を選択した人よりも自己主張が強かった ($p < .05$)。

IV. 考察

本研究では、困難への挑戦心の性質について探索するために、自己認知、領域自尊心、帰属スタイルの関連について検討することを主たる目的とした。その結果、困難への挑戦心は自己肯定感と正に相関したが、選択肢の分布の形状が異なっているだけでなく、因子分析において異なる因子として抽出された。すなわち、困難への挑戦心は自己主張と同じ因子に含まれ、自己満足感、自己肯定感、快楽主義が属する因子には含まれなかった。因子に含まれる項目の内容から、前者の因子は自己の積極性に関わるものであり、後者の因子は現状の受容や肯定に関わるものと解釈できる。異なる因子として抽出されたことから、困難への挑戦心と自己肯定感とは異なる性質を有する概念であるという可能性が示唆された。

困難への挑戦心と他の自己認知の共通性と独自性について考える上では、順序回帰分析の結果が参考になる。まず、共通性に焦点を当てると、困難への挑戦心は自己満足感、自己肯定感、自己主張などと同様に、明るさや決断力への領域自尊心と正に相関した。特に、明るさへの自尊心は、 β 値が .22~.30 であり、他の説明変数と比較した場合には高く、本研究で焦点を当てた自己認知を左右しうる重要な変数であると考えられる。明るさへの自尊心(調査項目としては「誇りをもつ」という表現)は、落ち込むようなことがあった時でも気持ちを明るく

してきたという自負を意味し、感情制御能力の高さを反映する可能性が考えられる。感情制御は非認知的スキルの1つであり、困難を乗り越え、長期的に望ましい結果を得ることに寄与することが示唆されている⁶⁾。ポジティブ心理学の知見によれば、困難に直面した場合でも希望を見出し、明るく対応する能力は学習可能なものであり¹⁸⁾、その熟達を重要な教育課題の1つとして位置づけた品格教育プログラムが数多く行われている¹⁹⁾。これらの知見を踏まえると、困難への挑戦心を育む上でも、全体的な自尊心を育む上でも、物事を前向きにとらえる特性を教育することは重要であるといえる。

次に、困難への挑戦心の独自性に焦点を当てると、困難への挑戦心は忍耐力や体力などの領域自尊心と正に相関していたが、他の自己認知ではこの相関が見られないか、弱いものであった。忍耐力や体力は困難に粘り強く取り組むためのリソースとなりうることから、これらの領域に自尊心を持つ者は困難挑戦における成功経験が豊富であり、自己効力感が高かった可能性が考えられる。自己効力感¹¹⁾や自己統制¹⁹⁾に関する研究では、特定の領域における努力や成功経験がその領域の対処能力を向上させることが示唆されている。困難への挑戦心について考える上では、明るい気持ちであるという感情制御能力だけではなく、実際に忍耐強く対処するという自己統制能力の高さも重要であると考えられる。長期目標の業績や脱落をよく予測するグリットの2つの構成要素のうちの1つが忍耐強さであり、グリットは年齢を重ねるにつれ、緩やかに上昇していくことが報告されているが²⁸⁾、本研究においても年齢が上がるにつれ、困難への挑戦心が高まるという相関が見られた。このような年齢による成長効果は他の自己認知の指標では見られなかった。これらの結果は、困難への挑戦心が自己肯定感や自己満足感とは異なる「自己統制」という側面をもち、子どもの意欲を高め、能力を伸ばしていく上で忍耐強さを教育することの重要性を示唆している。

困難への挑戦心を向上させる教育プログラムについて考える上では、自己満足感や自己肯定感と関連しているが、困難への挑戦心とは関連していない領域自尊心が何であるかについて詳細に検討することは重要な手がかりとなるだろう。このような領域自尊心としては頭の良さ・賢さ、容姿を挙げることができる。すなわち、頭の良さや容姿に誇りをもつ人ほど、自己満足感や自己肯定感が高くなるが、困難への挑戦心が高くなるわけではなかった。また、自己肯定感、困難への挑戦心よりも多様な自尊心の領域が関連しており、何かしら自分に肯定的な要素があれば高くなっていたと考えられる。これらの結果は、自己満足感や自己肯定感を育む方法と困難へ

の挑戦心を育む方法が異なる可能性を示唆している。実際、自己への賞賛（例えば、「難しい問題が解けるなんて、頭がいいのね」）と努力への賞賛（例えば、「難しい問題が解けるなんて、よく頑張ったのね」）では、後者は困難への挑戦心を高めるのに対し、前者は困難への挑戦心を低下させることが明らかにされている¹⁴⁾。自己肯定感や自己満足感は容姿をほめても頭の良さをほめても高まるが、これらは自分の努力によって向上させにくい属性であり、ほめたとしても自己統制への意欲や努力を引き出すことは困難であると考えられる。近年の自尊心に関するメタ分析によって、「自尊心は高い学力の結果であっても、自尊心を高めることで学力が向上するという因果関係は見られない」という可能性が示唆されており、学術的には自尊心という全体的な自己評価よりも自己統制能力などの特定のスキルを教育することの重要性が論じられるようになりつつある¹⁵⁾。「自尊心を育むことは良いことだ」という抽象度の高い視点を乗り越え、教育すべき資質とそのための教育方法について具体的に検討していくことが今後の重要な課題といえるだろう。

さらに、困難への挑戦心と他の自己認知の違いは、原因帰属スタイルとの関係においても見られた。分散分析の結果、最も重要な成功因として「個人の努力」を選択した人は「身分・家柄・親の地位」、「個人の才能」、「その他」を選択した人よりも、困難への挑戦心が強かった。このように、内的かつ統制可能な要因に注目する人がそうでない人よりも困難への挑戦心が高く、粘り強く取り組むという知見は知能観研究において報告されている¹²⁾。一方、他の自己認知の指標では同様のパターン得られなかった。すなわち、自己満足感や自己主張では帰属先による評定値の差は顕著ではなく、自己肯定感では帰属先による違いは見られたが、「個人の能力」や「運・チャンス」を選択した人では「その他」を選択した人よりも自己肯定感が高いという結果が得られ、知能観研究とは異なるパターンを示していた。知能観研究との整合性という点では困難への挑戦心の指標がもっとも良好であったと考えられる。知能観研究では困難への挑戦心の規定因として帰属スタイルの影響が大きいことが示唆されており、困難への挑戦心を育む方法として帰属スタイルへの介入の重要性が強調されている。知能観研究に基づく教育的介入は我が国では行われていないが、アメリカの教育現場で実践が行われており、成果を挙げている¹⁰⁾。今後は、我が国においても知能観に関する研究と教育実践が重要な課題となると考えられる。

本研究から得られた知見をまとめると、困難への挑戦心を育む上では、感情制御能力、内的かつ統制可能な要因への帰属、自己統制能力の3つが重要であるといえ

る。これらは異なる特性であり、その育成のためにはそれぞれ異なる教育が必要となる可能性が考えられる。このような発想はポジティブ心理学における品格教育（character education）の視点と軌を一にする。品格は習慣的に刻み込まれた人格の部分であり、良い行動の習慣を形成することで変えることができる²⁰⁾。品格教育では、よい品格の基礎としてメンバーが共有する核となる倫理的な徳（virtue）を設定しており、児童や生徒が勤勉、誠実さ、個人的な信頼、勇気、忍耐力などの徳を習得できるように支援することを目指している。これらの徳を育むためのワークは、ポジティブ心理学という大きな視点において統合されているが、徳ごとの性質や育成方法については異なる学術的背景をもつ研究に根ざしているという点では個別的なものである。例えば、ポジティブ心理学的な教育のワークには、知能観研究に基づく介入が含まれている。このように、ポジティブ心理学に基づく教育では個別的な心的特性がトレーニング対象とされ、その特性に応じたトレーニング方法が考案されているといえる。これは、自尊心や自己肯定感を高めることで、学力、積極性、社会適応などの諸側面を一括して向上させようとする教育的アプローチとは異なっている²¹⁾。先述の通り、自尊心を高めることで、積極性を向上させることは可能であっても、学力向上につながるわけでも、危険行動が減少するわけでもない¹⁵⁾。伸ばそうとする能力により教育効果のある方法が異なる可能性を踏まえると、今後は大学と教育現場が連携を強化し、育成すべき能力とその方法について検討を重ねていくことが重要な課題となるであろう。

最後に、本研究の制約について述べておきたい。本研究で得られた結果は先行研究のものと一致しており、結果の解釈は妥当性を有すると考えられるが、概念測定においては課題があるといえる。本研究が分析対象とした「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」では概念測定を1項目で行っているため、概念測定の精度が粗く、ある項目への同意がどのような意味をもつかを詳細に知ることが難しい。例えば、「明るさに誇りを持っている」という項目への同意は、感情制御してきた自負を意味するのか、朗らかな性格を意味するのか、それとも別のことを意味するのか曖昧である。この概念測定における曖昧さは、本研究の知見を解釈する上で留意すべき点であると考えられる。今後は、複数の項目により概念測定を行う調査を設計するとともに、困難への挑戦心を支える諸要因について詳細に検討することが必要とされる。

謝辞

本研究は科研費 JP16H03743 の助成を受けて行われた。本論文を執筆するにあたっては、内閣府よりデータをご提供いただいた。厚く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 和田春菜・木下裕介・水野有智・福重真一・梅田靖 (2013). 持続可能社会に向けたバックキャスト型シナリオ作成手法の提案, 日本機械学会論文集 C 編, **79**, 845-857.
- 2) Colvin, G. (2008). *Talent is overrated: What really separates world-class performers from everybody else*. New York: Portfolio.
- 3) 吉田寿夫・村山航 (2013). なぜ学習者は専門家が学習に有効だと考えている方略を必ずしも使用しないのか 教育心理学研究, **62**, 32-43.
- 4) James, W. (1890). *The principles of psychology*. New York: Holt.
- 5) Terman, L. M., & Oden, M. H. (1947). *The gifted child grows up: Twenty-five years' follow-up of a superior group*. Oxford, England: Stanford University Press.
- 6) Mischel, W. (2014). *The Marshmallow test: mastering self-control*. New York: Little, Brown, and Company.
- 7) Blackwell, L., Trzesniewski, K., & Dweck, C. (2007). Implicit Theories of Intelligence Predict Achievement Across an Adolescent Transition: A Longitudinal Study and an Intervention. *Child Development*, **78**, 246-263.
- 8) Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M. D., & Kelly, D. R. (2007). Grit: Perseverance and passion for long-term goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 1087-1101.
- 9) Bjork, R. A. (1994). Institutional impediments to effective training. *Learning, remembering, believing: Enhancing human performance*.
- 10) Dweck, C. S. (2006). *Mindset: The new psychology of success*. New York: Random House.
- 11) Bandura, A. (1995). *Self-efficacy in changing societies*. New York: Cambridge University Press.
- 12) Dweck, C. S. (2012). Implicit theories. In P. M. Van Lange, A. W. Kruglanski, & E. Higgins (Eds.), *Handbook of theories of social psychology* (Vol 2, pp.43-61). Thousand Oaks, CA: Sage.
- 13) PERTS. *Growth mindset lesson plans*. (https://www.mindsetkit.org/static/files/YCLA_Lesson_Plan_v10.pdf)
- 14) Mueller, C. M., & Dweck, C. S. (1998). Praise for intelligence can undermine children's motivation and performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 33-52.
- 15) Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or heal their lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, **4**, 1-44.
- 16) Crocker, J., & Wolfe, C. T. (2001). Contingencies of worth. *Psychological Review*, **108**, 593-623.
- 17) 内閣府 (2014). 平成 25 年度 我が国と諸外国の若者意識に関する調査
- 18) 文部科学省 (2016). 自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上 (第十次提言)
- 19) セリゲマン, M. (2013). オプティミストはなぜ成功するか パンローリング
- 20) 青木多寿子 (2014). 品格教育とは何か: 心理学を中心とした理論と実践の紹介, 発達心理学研究, **25**, 432-442.
- 21) Baumeister, R. F., & Tierney, J. (2011). *Willpower: Rediscovering the greatest human strength*. New York: Penguin.